



## 東北地方における地域日本語教室に関する文化人類学的考察 日本人支援者の視点をもとに

著者	佐藤 悦子, 李 仁子, 佐藤 寛貴
雑誌名	東北大学大学院教育学研究科研究年報
巻	66
号	2
ページ	1-16
発行年	2018-06-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00123154">http://hdl.handle.net/10097/00123154</a>

# 東北地方における地域日本語教室に関する文化人類学的考察

—日本人支援者の視点をもとに—

佐藤悦子\*

李仁子\*\*

佐藤寛貴\*\*\*

本稿では、日本人支援者の視点をもとに東北地方の地域日本語教室について文化人類学的に考察することである。これまでに地域日本語教室に関する研究はいくつも重ねられてきたが、そのほとんどは学習者に関するものや教育方法論に関するが多く、支援者視点から見たものは少なく、文化人類学的に考察したものは無かった。本稿では宮城県角田市、岩手県滝沢市、秋田県能代市の3つの地域でフィールドワークを行った。

分析の結果、3つのことが特徴づけられた。1つは宮城県角田市において、支援者と学習者の双方にとって地域日本語教室が拠り所となっていること、2つ目は岩手県滝沢市において、ボランティア主体で行われてきた地域日本語教室の制度化による成果が可視化されたこと、3つ目は秋田県能代市において、支援者を軸とした地域協働を導く支援が行われていることである。

**キーワード：地域日本語教室、支援者、学習者、ボランティア**

## 1. はじめに

日本に存在する在留外国人数は、法務省『在留外国人統計』によれば2008年の2,217,426人をピークに2012年の2,033,656人まで減少の一途をたどったが、それ以降は上昇し続け、2017年6月末には2,471,458人となり、2012年と比較すると437,802人の増加となっており、この傾向はこれから先もまだ続くように思われる。そのような多文化化が進む我が国において、地域で生活する外国人に日本語を教え、生活のサポートをする場となっている、地域日本語教室がある。地域日本語教室とは地域日本語教育を行う場所であり、地域日本語教育とは野山(2013)によれば、1990年の出入国管理及び難民認定法(以降、入管法)の改正・施行以後の、地域の状況や需要に応じて実施展開されてきた日本語教育を指す<sup>1</sup>。入管法が制定されてから28年が経過しているが、その間に数多くの地域日本語教室が設立されてきた。国際化・グローバル化が目覚ましく進んだ今日において地域日本語教室は日本社会においてどのような立ち位置となっているのだろうか。筆者は地域日本語教室のボラ

---

\*教育学研究科 博士研究員  
\*\*教育学研究科 准教授  
\*\*\*教育学研究科 博士課程前期

ンティアとして3年ほど教育や運営に携わってきた。教室にくる学習者の属性は様々であり、中でも日本人配偶者の人たちは日本社会で葛藤を抱えながら生活していた。日本語教室に参加するボランティアの主な職務は日本語を彼女らに教えることであるが、様々な思いを抱えている彼女らをサポートすることも無意図的に重要な職務の1つとなっている。ボランティアの中には20年以上もこの活動に従事している者もあり、都道府県によってはネットワークを結んでいるところも存在する。このようなことを鑑みると、教室に通う外国人以上に、そこで教育・運営するボランティア等の支援者にとっても地域日本語教室は特別な場所なのであろうか。支援者にとって地域日本語教室というものはどのような存在なのであろうか。

これまで地域日本語教室に関する研究は様々な形で行われてきている。その中心となっているものは日本語教授に関する方法論、実践に関する研究<sup>2</sup>や日本語を学ぶ学習者、つまり教室に参加する外国人に関する研究<sup>3</sup>であり、本稿のような支援者に関する研究<sup>4</sup>は少ない。多文化共生という言葉は日本ではよく聞かすが、その中で外国人の流入に目が行きがちである。しかし、入ってそれで終わりということにはできず我々日本人側が受け入れるという姿勢が整って多文化共生というものが成立すると考える。特に地域日本語教室の支援者は日本にきた外国人の方をサポートしており市民一人ひとりの目線で受け入れる体制を整えている。そのように考えると地域日本語教室の支援者に着目するということは多文化共生社会を目指す我が国においては重要な意義があると考えられるのではないだろうか。

地域日本語教育に関する研究は主に1つの教室、あるいは1つの都道府県に限定して調査・考察したものが多く、そして事例を取り上げることが中心となっており考察が不十分な研究も散見しており、更に横断的な研究は少ない。複数のフィールドに跨った研究としては野山ら（2009）のほか少数である。またその視点は学習者である外国人に向けられたものがほとんどであり、支援者についての視点も加味した研究は少ない。よって本稿では東北地域にフィールドを絞り、支援者の視点から地域日本語教室の現代的意義について考察していく。

## 2. 調査の概要

本研究の調査方法は文化人類学で用いられるフィールドワークである。調査地は宮城県角田市の「角田市日本語講座」、岩手県滝沢市「日本語ボランティア“すまいる”」、秋田県能代市「のしろ日本語学習会」の東北3地域である。調査についてであるが、佐藤寛貴が宮城県角田市の日本語教室を2014年9月～2015年12月、2016年7月～2017年1月の期間でフィールドワークを行い、2015年11月下旬に支援者に対し2時間程度の集団聞き取り調査を行い、秋田県能代市の日本語教室でのフィールドワークは2017年10月下旬に行った。また李は北川氏と2008年から親睦があり教室にも何度も足を運び、2010年には東北大学に北川氏を招き「国際結婚移住者の現状と地域参画」をテーマにシンポジウムを開催した。岩手県滝沢市の日本語教室については、佐藤悦子が2017年6月から参与観察を開始し、佐藤寛貴が2017年10月上旬に、佐藤悦子が2018年2月に2時間程度の聞き取り調査を行った。なお佐藤寛貴は実際に角田市日本語講座にボランティアとして教育・運営に参画した経験があ

る。どのフィールドワークにおいても日本語教室に参加する支援者の方に約2時間程度のインタビュー調査を行った<sup>5</sup>。

## 2-1. 支援者・学習者の双方にとっての心の拠点

### (1)角田市日本語講座

宮城県角田市は宮城県南部に位置する自治体である。平成29年1月1日段階での人口は30,097人<sup>6</sup>であり、同期間内での在留外国人数は171人<sup>7</sup>である。「角田市日本語講座」は毎週木曜日の10:00～12:00に開かれている。学習者として参加しているのは外国人配偶者、乳幼児を持つ外国人配偶者(母親)が中心である。

今日では角田市日本語講座は角田市役所の政策企画課が担当する行政主導のものとなっているが、元々は藤野氏(仮名)と担当市役所職員が中心として活動していたボランティア団体が主導していた教室であった。藤野氏がこの団体を立ち上げるきっかけとなったのは県からの要請を受けたことだった。当時角田市とその近くの丸森町の大内地区に大勢の外国人花嫁たちが流入したために県はそのような措置を施したという。それに関して藤野氏たちは受諾し、日本語講師養成講座を受け、平成10年に角田市日本語講座が本格的にスタートした。角田市が着手し現在のような運営体制になるのは平成15年からである。これにより日本語講座を行う場が安定的に供給されることになり、また、従来までは教室で学習者が連れてくる子供の世話を見るという託児をしながら日本語も教えなければならず、どうしても託児をするのであれば有料で引き受けなければならないという形であったが、行政主導になってからは、教室がある建物の中の別の場所に無料の託児所が設けられた。それに加えて支援者の日本語教授能力の向上のために宮城県国際交流協会から専門講師を招いて研修を受ける機会も豊富にある。

### (2)支援者と学習者が織りなす教室

集団インタビュー調査を行った2015年11月段階において、角田市日本語講座には4名の講師と3名のボランティアがいる。藤野氏をはじめとする講師4名は全員ボランティアからキャリアをスタートした人たちである。4名の講師は現在でも角田市日本語教室の教育・運営に携わっているが、ボランティア3名は各々の事情から現在は活動していない。角田市日本語講座では講師は固定的ではあるがボランティアはかなり流動的な出入りがあり、1年経過すると辞めていってしまう傾向がある。つまり角田市日本語講座においては講師が非常に重要な役割を担っており学習者からの信頼も篤い。特に教室を立ち上げた当初からいる藤野氏は教室の支柱となっている。最初に教室に来てくれた学習者の方々の大変な、気の毒な様子を見て、何か役に立てればと思ったことが現在まで教室を続けている強い動機となっているという。当初は3カ月を節目として辞めようとも考えたこともあったというが、学習者の中にはご主人・嫁ぎ先の姑の方と衝突してしまい、助けを求めに来る方もおり、辞めるに辞められなくなり、より一層角田市日本語講座の活動に専念するようになっていったという。先に述べた最初の受講生の方々の印象が藤野氏にとっては強烈であり、そのことから自

分の子供を見る目が変わってきた。自分の子供と学習者の方々の境遇を比較すると、20代前半くらいか、あるいはそれより若い年齢で日本に来て、親の縁も薄く、誰も頼る人がいないという状況の中で学習者の人たちの頑張っている姿を見て、自分の子供は大分恵まれているなど感じたと言った。そしてそのような受講生の方々と接していくうちに、考え方の根本は皆一緒であることに気づき、そのことから国に対する偏見が取り払われ、自分の子供というのに縛られない考え方ができるようになり、自身の子供に積極的に社会経験を積ませるようにしたとも言った。また学習者に、藤野氏の子供にやり残したことを少しでも教え、身に付けてもらおうと努め、学習者のために自作の教材を毎週必ず作成し、それに伴い読書量も増え、それを発信する場として日本語講座を利用しているという。加えて藤野氏は日本語を教えることのみならず、学習者の日常生活の面でも積極的にサポートしている。特に強調して語っていたのがセナさんとルナさん（両者とも仮名）の方についてであった。セナさんは農家に嫁いだ韓国出身の女性であり、当初は全く日本語を話せず、日本語講座に来た際も姑と同伴であった。病院に行った際も姑が同伴で、日本語が全く分からず、自分の言いたいことも話せずかなりストレスが溜まっていたという。そして家庭内では嫁姑の間での衝突があり、姑との関係は良好ではなかった。だが日本語講座に通い続けることによって、藤野氏から様々なアドバイスを受けたことや他の学習者の支えもあり、一時期は鬱病気味だったセナ氏が、徐々に表情が変わってきたと藤野氏は語る。セナさんは藤野氏の作成するプリントを本当に日々の生活に参考にしており、いつも大事そうに持ち帰っている。

ルナさんは角田市日本語講座ができてから15年間ずっと通い続けているフィリピン出身の方である。ルナさんは子どもが5人おり、家計を支えるために夜勤の仕事をしながら、その合間を縫って教室に通い続けている。フィールドワークの中で、ルナさんは職場で外国人は自分しかおらず、職場の人間関係も含めて辛い思いをしたことがあったと言った。そんな環境の中でも現在まで休まず教室で熱心に日本語を勉強する姿にルナさんを担当している藤野氏のみならず他の支援者も感銘を受けていた。特に藤野氏はルナさんと親交が長くルナさんが日本へ来てから感じたことや思ったことをずっと聞き続けているので厚い信頼が構築されていた。教室ではルナさんの日本で刻苦勉強する姿を見て積極的に支えたくなり、それに伴ってルナさんも角田市日本語講座という自分を温かく迎えてくれる場所があるからこそ、こんなにも長く教室へ通うことができるのではないだろうか。

しかし教室運営について藤野氏だけでは人手が全く足りない状況であり、日によっては藤野氏1人に対して学習者が20人という状況もあったという。そこで藤野氏は上山氏（仮名）を角田市日本語講座に誘ったのであった。当時は、H氏自身、お義母様が亡くなってから引き込もっている状態であったが、他者と関わりたいという気持ちもあったと語っており、日本語講座への参加を決めたという。だが上山氏は当初は3カ月を節目のつもりで角田市日本語教室の活動を続けていたが、普段から何気なく使用している日本語をいざ教えるとなると難しく、日本語に対して知らないことばかりであったと実感し、自分も勉強しなくてはならないと思い始めたという。日本語を教える活動は上山氏自身にとって励みになっているものであり、終わりのないものだし、教室に来る全員の方と接していきたいという。上山氏は日本語講座に参加するようになってから丁寧な日本語を使う



ようになったと気づく。丁寧な言葉を使うことは、どんな人に対しても、人間同士で高めあう大事なものであることに気づき、それと同時に日本語の良さにも気づかされたという。自身に以前よりも強い愛国心が芽生えたとおっしゃった。そして、改めて日本語について考えさせられ自身の成長にもつながり、これがあるのは日本語講座のおかげだと感謝の意を込めて伝えてくれた。

また上山氏は角田市で開かれていた韓国料理教室に参加した際、川口さん(仮名)を角田市日本語講座に誘った。川口氏は当時、自分が役に立てる事について探している最中であり、当初は日本語を教えるということに不安感を抱いていたが上山氏の勧めもあり見学に踏み切ったという。それが2010年ころの出来事であったという。上山氏ははじめ、日本語教育の方法論や内容についても全く分からない状態であり、かつその状態で指導者研修にも出席しなければならず、非常に大変な思いをしたというが、それを機にして、上山氏は目まぐるしく成長したと藤野氏は言う。川口氏はペルシャ語を母語とする学習者であるルーシーさんの担当をしていたが、教えていた当時はペルシャ語に対応した日本語学習のテキストはまだ存在しておらず、川口氏は自分でペルシャ語を調べながらテキストを作成することや、日本語とペルシャ語を話せるルーシーさんの夫に協力を求めるなど工夫に工夫を凝らした。それと同時に川口氏はルーシーさんの日本の生活の悩みを聞くことや相談にも乗っており、来日したばかりで不安が募っていたルーシーさんの心の支えのような存在になっていた。川口氏は持病の治療のため教室を長期間離脱しなければならない時期もあったが、復帰した際には教室の様々な方たちから復帰を喜ぶ声が上がった。

支援者の三者はともに大変な経験も重ねてきたが自分が頑張った分、学習者もそれに応えてくれて、信頼関係が構築されていった。充実感という意味でやりがいを感じており、角田市日本語講座をホームとして非常に愛着を持っていることがわかる。支援者・学習者が互いに良い刺激を受け合い、居心地の良い教室が創出されているのではないかな。

## 2-2. 日本語ボランティアの支援の制度化

### (1)日本語ボランティア“すまいる日本語”

本項では、岩手県滝沢市の日本語ボランティア“すまいる日本語”(以下、すまいる日本語)を事例に、いかにして日本語ボランティアによる外国人支援が制度化されるのかを明らかにする。

岩手県滝沢市は2014年に村制施行から市制施行に移行した自治体である。平成29年1月1日時点での人口55,110人<sup>6</sup>でそのうち在留外国人の数は136人<sup>7</sup>である。日本語ボランティア「すまいる日本語」は2013年に設立された。2013年、「すまいる日本語」代表の大村氏(仮名)は滝沢市の葉の木沢山活動センターで日本語活動サポーター研修を開催した。当時、滝沢市に日本語教室を立ち上げるため、協力者を募ることが研修の目的であった。約20名の申し込みがあり、講座回数は5、6回ほどであった。その中で日本語ボランティアとして残ったのは関田氏(仮名)や小野寺氏(仮名)3名だけだったという。

現在、支援者は大村氏、関田氏ら4名である。活動は毎月第2、第4日曜日の14:00～16:00に「葉の木沢山活動センター」で行われる。この活動センターは最寄り駅から徒歩10分程度の場所である

が、ある学習者は交通の便が悪いことを学習者が集まらない理由のひとつだろうと語る<sup>8</sup>。設立当初はなかなか学習者が集まらず広報に載せるなど様々な試みを行った。最初の学習者は大村氏が盛岡市で開く日本語教室「じょい」<sup>9</sup>に通っていた方である。その後、岩手県国際交流協会の担当者に斡旋してもらい中国出身の学習者が徐々に増えていったが、ある程度日本語が喋れるようになると通わなくなるということが続いた。現在、受講生はベトナム出身の技能実習生とイタリア出身の技能実習生である。

## (2) 支援者と学習者の相互作用的な関係性

本項では、日本語教室「じょい」と日本語ボランティア「すまいる日本語」に通い、大村氏と20年来の付き合いがある学習者マリアさん（仮名）との個別的な関係性に着目し、地域日本語教室における学習者と支援者の関係性について述べる。

日本語ボランティア「すまいる日本語」の代表である大村氏は、自らの外国語学習を通じて、地域日本語教室に関わるようになったという。彼女は、結婚による岩手県への移住を機に、スペイン語やドイツ語など外国語を熱心に学習し、1992年から高校でスペイン語講師をしていた。ある日、彼女は同僚の講師からチリ人の技術研修生に日本語を教えるように依頼された。当初は、「『スペイン語習うから日本語教えてあげようか』みたいな交換みたいなかんじでやっていたんですよ」と彼女は語るように、自らの外国語学習への熱意に掻き立てられて日本語ボランティアを引き受けたという。しかしながら、日本語を教えていくうちに、「ちょっと待てよ、私うまく教えられないな」と日本語ボランティアの難しさを感じ始めたという。こうした中、盛岡市主催の異文化理解講座や日本語サポーター養成講座などに参加し、日本語の教授法を学んだ。このように、自らの外国語学習を通じて、自然と日本語ボランティアとしての道へ誘われていった。

マリアさんとは、彼女が1997年以降に盛岡市の日本語教室「じょい」に通い始めたことで知り合った。当時、マリアさんは車で1時間ほどかかる遠方からバスで通い、熱心に日本語の学習に取り組んでいたという。その後、スペイン語学習者でもある大村氏は、「ただスペイン語話したい一心」で、マリアさんの自宅に通い日本語教室以外の場で彼女と交流するようになった。マリアさんは、大村氏と自宅で話した時間について「すごくうれしかったです。友だちいなかったから、すごい助かりました」と語る<sup>10</sup>。また、他の学習者についても、大村氏は学習者の自宅を訪問し、個別の交流を深めた。料理レシピの翻訳や子どもの卒業式・入学式出席のための服装のアドバイス、そのための装飾品を貸すこともあったという。こうした日本語教室の「外」における個別の交流は、互いに外国語を学び合う時間であると同時に、異文化の中で暮らす学習者にとってストレス解消と重要な他者との交流の場となったと思われる。

大村氏によると、マリアさんは文法としてはN3レベルまで到達したが、漢字熟語の習得が課題であるという。大村氏が日本語学習をするうえで文法と漢字を「しっかりと根気強く学んでほしい」と語る。学習者の中には、ある程度リスニングができるようになってアルバイトを始めた人が多い。「わたし、東京、行きます」や「主人、行きました、明日」など、助詞を抜かしたり、時制による動

詞の変化ができていなかったりと、「きちんと習う」までに日本語教室を離れてしまうという。こうした中で、マリアさんが熱心に何年も日本語教室に通い、文法的にはN3レベルに到達したことは、大村氏にとって、留学生以外では「ある程度のレベルまで達した」数少ない学習者の一人である。

一方で、マリアさんは、課題とする漢字を克服するため、滝沢市の「すまいる日本語」に通い始め、子育てや仕事などで中断していた日本語の学習を再開した<sup>11</sup>。こうした中、2016年、滝沢ユネスコ協会から国際理解講座の講師を紹介するように大村氏に依頼があり、マリアさんを紹介したのだという。

### (3)外国人が活躍できる場の希求

2017年1月には滝沢ユネスコ協会の新年会に大村氏とマリアさんも招かれた。その際、参加者の間では滝沢市国際交流協会の設立の話で盛り上がり、すぐに発起人会が立ち上がった。日本語ボランティア「すまいる日本語」代表の大村氏とスタッフの関口さん、小野寺さん、マリアさんとその夫の渡辺さん(仮名)、さらに滝沢ユネスコ協会から役員2名の合計7名がメンバーであった。2017年6月には第1回総会が開かれ、滝沢市国際交流協会が発足した<sup>12</sup>。そこでは、会長として滝沢ユネスコ協会役員の飯田さん(仮名)が、副会長としてマリアさんの夫の渡辺氏が、理事としてマリアさんが選出された。大村氏は理事としてのマリアさんを外国人の立場から意見してくれる重要な「助言者」であると語る。マリアさんは日本語を継続して学んでできるようになったこととして、「国際交流協会の設立」と答えた。以前、設立の話が出た時には日本語にまだ自信がなかったが、今回は今ならできると思ったという。来日当初の自分自身と同じような思いをしている外国人の手助けがなかったため、国際交流協会の設立に積極的にかかわったと言う。一方で、大村氏は事務局として業務に従事することになった。総会の中で、国際交流協会の事業として日本語教室が開催され、日本語ボランティア「すまいる日本語」から講師を派遣する形態をとることが決まり、「すまいる日本語」と国際交流協会は「自然と合併する」ことになった。すなわち、「すまいる日本語」が母体となって、日本語ボランティアをはじめとした多様な事業を実践するために制度化されたのが国際交流協会の設立であると考えられる。

また、2017年8月から10月まで国際交流協会の一事業として「スペイン語講座(全10回)」が開催され、16名が参加した。講師は、マリアさんであり、夫の渡辺氏がサポートを行っていた。大村氏は授業の最初に茶菓子をもって顔を出す程度で授業は完全にマリアさんに任されていた。参加者のほとんどはスペイン語の初心者であり、教材には市販されている初級のテキストのコピーが使用された。授業の初めに、マリアさんは、その日学習する文法について日本語で説明をするが、あとで夫が補足することもあった。基本的にはテキストに沿って授業がすすめられたが、関連するようなことを説明したり、丁寧に質問に答えたり、習った単語や文法で話すことを繰り返したりするため、進度としてはかなりゆっくりであった。しかしながら、授業の最後には、それまでに習った3つの動詞と文法、単語を習って、自分の紹介文を作り、発表しあった。

このように、支援者である大村氏は、学習者であるマリアさんを理事として国際交流協会にかか



わってもらったり、さまざまな場面での講師に推薦したり、起用したりしてきた。大村氏は、自らが外国人をサポートする上で努力していることについて次のように述べている。

相手が持っている素晴らしさを引き出してあげる。それは、やっぱりやっています。例えば、マリアさんだったら、スペイン語の講師としてどんどんその人を持ち上げてあげる。アンジェラさんだったらほかの方面でいろんな事やっていますので、その能力を、みなさんにこのように日本で努力していつてんだよということを私たちがその人に替わってPRをしてあげる。その代わりに私達にも貢献をしてもらうという。もらってあげるという。

さらに、日本語教室と「合併」した国際交流協会という場については次のように語る。

国際交流協会という一つの場の中に入ってきて、そこで地域の人とコミュニケーションとりながら自分の立場を広げていくということ。やっぱり努力ですね。そのために私達はそういう場を多くもってあげるために、国際交流協会ですらいろんなことをして、来てほしいんですよ。

このような大村氏の語りからは、日本語学習者と地域社会の仲介人としての支援者の姿を垣間見ることができる。さまざまなイベントや講座を開催するなど、地域で暮らす外国人たちの「素晴らしさ」を生かせるような土壌づくりに励んでいる。とはいえ、講師については、単なるおしゃべりではないため、文法的にも「ちゃんとした」日本語で説明できる外国人でなければ推薦できないと語る。すなわち、学習者自身の特徴や長所を生かして地域社会の中で活躍でき、社会に貢献できるようになるためには、「ちゃんとした」日本語の習得が必要であるという。例えば、講師として推薦できる、あるいは講師として活躍してもらうことは、大村氏の日本語の指導を成果を目に見える形で示せることにもなる。そこで、「ちゃんとした」日本語の習得のためには、大村氏は「(外国人は)日本語力は低い、小学生並みかもしれないけれど、(日本語を教える際は)人間としてはもう大人なんだから尊重する」ことが重要であり、小学生の教科書などを使ったりせず、「あくまでも日本人が話す言葉をわかりやすく丁寧に教えることが基本」とであると語る。彼女が考える日本語学習のサポートは、仰々しく「国際交流」や「異文化理解」という看板を掲げつつも<sup>13</sup>、「杖を落とした、財布を落とした人がいたら、それを拾ってあげる」感覚で相手を尊重しながら日本語教室や国際交流協会を通して外国人への支援を実践している。

このように、日本語ボランティアを国際交流協会への制度化する過程に組み込むことは、学習者にとっては日本語の学習の場である以上に地域で活躍できる場となる可能性がある。一方で、支援者にとっては自らの日本語の指導を受けた学習者が活躍できるということは、自らの指導の意義を示す事ができる絶好の場であるともいえる。

## 2-3. 地域全体による包括的支援

### (1)のしろ日本語学習会

秋田県能代市は秋田県北部に位置する日本海に面した自治体である<sup>14</sup>。平成29年1月1日段階での人口は55,248人<sup>6</sup>であり、同期間内での外国人住民の数は192人<sup>7</sup>で、そのうち女性が166人<sup>13</sup>という外国人女性の割合がかなり高いことが特徴である。「のしろ日本語学習会」は毎週火曜日の19:00～21:00と毎週木曜日の10:00～12:00に開かれている。火曜日は外国人配偶者とその子ども、公的機関研究員とその家族、留学生(高校生)、ALTなどを対象としている。なお子どもについては学齢期で来日した児童・生徒を指している。木曜日は外国人配偶者、乳幼児を持つ外国人配偶者(母親)、親子、また外国人配偶者の子どもも参加することができる。のしろ日本語学習会は地域や学校と連携した体制を築いているため木曜の時間帯でも学校に通っている子どもを日本語教室へ参加させ、その時間を授業時間へと当てることが可能である。曜日によって教室が開かれる場所も異なり、火曜日が能代市中央公民館で木曜日が働く婦人の家という所である。

のしろ日本語学習会(以下学習会)の設立経緯について、北川氏によれば、1991年に初めて迎え入れる中国帰国家族12名に対する通訳及び日本語指導者として北川氏個人が能代市から委託されたことを契機に設立した会であるが、海外出身者との接触経験がない地域住民と帰国家族との間で起きる文化的差異を起因とするトラブルが生じてしまうことなど、地域社会において日本人と外国人との間に多くの障壁が存在していることを北川氏は実感したという。北川氏はトラブルが発生するたびに駆けつけ交渉を担ってきたが、日本語指導と同時に生活圏を取り巻くソーシャルワーカー的存在と日本語教授法の必要性を痛感し、自分自身が学び直し平成6年に正式にのしろ日本語学習会を立ち上げた。

教室を立ち上げた当初、学習者は外国人配偶者の方々が中心であった。だが現在では、それに加えて外国人配偶者を親に持つ子どもの教育についても学習会において行っている。学習者の方々のことを北川氏はバイリンガルになる可能性を十分秘めている人材であると考えている。仮にその人たちが言語弱者にしていまえば親であるその人たちは子どもたちに勉強を教えることもできず、子どもも勉強がわからなくなって学校の授業についていけなくなってしまう、という悪循環ができてしまうのではないかと危惧した。子どもの成長と同時に子どもが日本人として育っていくから日本語を常に教えていかなければならないと思いこのような体制にしたと語ってくれた。子どもの学習に関しては学校の授業と絡んでくるため北川氏は学習指導要領も把握しながら指導に当たっていると同時に、学校の校長先生を経験したことのある北川氏のご主人とも協力しながら運営しており、生徒の高校進学率は100%という実績である。火曜日がこのような形で行われているので、木曜日の教室は親子で、乳幼児も参加できるような場所で教室が開かれている。

また、教室では日本語学習のみならず、学習者を地域の中で根差していけるようにするため取り組みや日本の文化を伝える取り組みが様々行われている。その内容としては花見、着物の着付け体験、盆踊り、忘年会、バス旅行、お茶会などである。花見は教室に参加している人たちだけで行うのではなく能代市に住んでいる方であれば誰でも参加することができる。着物の着付け体験では実際

に専門の着付けの先生を呼ぶことによって、より細かい日本の文化を伝えることができるのみならず、敬語のきちんとした使い方も学ぶことができる。バス旅行では日本社会のルールを学ぶことができる。日本に来たばかりの外国人は時間にルーズで多く集合時間を守らないことが多々あると北川氏は言っていた。バス旅行の際は時間には特に厳しい態度で臨み、遅れてきた場合には置いていく処置をすることもある。実際に日本で仕事をするとなったならば時間を守ることは必要最低限のマナーであり、それを守れないと信頼関係を築くことに問題が生じるので、教育は必要だという。盆踊りもまた能代市に在住する方たちが学習者に踊りを教えてくれる。これらのイベントは教室にも地域にも根付いており、花見今年で20年目、忘年会は23年目、盆踊りは21年目になるという。このイベントにより外国人の方々とは日本についてよりよく知ることができるのみならず地域の人と交流することができ地域社会に溶け込みやすくなる。そして能代市に住む方たちもまた遠い存在に思われた外国人の方々は、実は自分たちの身近にいるのだということを実感することができ地域全体で彼ら彼女らを支える体制を整えることができ、改めて地域日本語教室がどのような存在であるかということを確認できる。のしろ日本語学習会は、まさに地域一体となっている日本語教室なのである。

## (2) 支援者について

前述したように、のしろ日本語学習会を立ち上げた北川氏は元々中国残留孤児に対する支援を行っていた。海外出身者と地域住民の間で文化・習慣の違いによる摩擦が生じ、問題になることから日本語教育活動を通じて言葉の支援だけでは不十分であると感じたと北川氏は語る。そのために言語支援のみならず地域が一体となるような教室作りに力を入れている。その背景には北川氏のどんな考えがあるのだろうか。北川氏は教室にいる学習者たちについての思いを以下のように述べた。

秋田で結婚する人たちって、東京にいるような人たちじゃないから、そういうふうには結婚するわけじゃなくて、過疎化少子化対策の一環のように来たお嫁さんを、人数合わせの親にしてしまえば、その人たちから生まれた子は、完全に、生きる学びの権利もそうだし、生きる権利も最初から消してしまうことになるから、それは絶対にダメだっていうのもあったんで、今は確かに弱者に見えるけど、学ぶことによってバイリンガルになる可能性を十分秘めている人たちであるから、その人たちに教える教室（中略）

秋田県能代市では外国人女性の割合が高い。そして能代という場所は冒頭でも述べたように地理的に外から開かれた場所とは言い難く、能代に来た外国人配偶者の女性のほとんどは能代で暮らさなくてはならない。北川氏の言葉にもあるように、ただ受け入れただけで終わりにするのではなく、異文化圏から受け入れたその人を地域に馴染ませなければならない。のしろ日本語学習会では彼女たちが一人前になれるよう教育されていくのだ。そのため教室での日本語指導の際、北川氏は自作のテキストを使って徹底的に、厳しく指導する。生半可な、中途半端なコミュニケーションしかで

きない日本語では舅・姑はもちろん、能代にいる住民の方から可愛がられないからであると北川氏はいう。そして日本の文化を学んでもらうため、能代に住む人たちと積極的に接点を作るために様々な行事を行う。そうすることによって学習者である外国人配偶者の人たちは田舎の生活というものを理解する。これら北川氏が中心となって行っていることは学習者を能代に馴染ませるための教育というものであると同時に、学習者が外へ出ることを食い止めるための努力とも言えるのだ。以前能代では能代での暮らしに不満を持つ外国人を対象にブローカーが接触するというようなこともあり、そのブローカーのせいで能代を不安定な状況に貶めたということがあった。これらの活動はこの出来事と深く関連があるのだ。

教室には北川氏以外にもボランティアが数名おり、その中の1人に、一度東京で就職をしたが、仕事を辞め再び出身地である能代市に戻ってきた若い人たちがいた。能代の教室は教室関係者以外のあらゆる人たちが見学できるようになっており、その人たちも教室を見学した際にのしろ日本語学習会でボランティアをすることを決めたという。活動の内容が日本語を教えるというボランティアという社会に貢献できるものであり、その人たちを社会につなげるための一助となっている。のしろ日本語学習会は学習者だけのものではなく、地域全体として共有されているものでもあり、新しく支援者として参入してくる人たちの受け皿ともなっており、北川さんを軸として様々な要素を取り込んでいる。

### 3. 考察

#### 3-1. 支援者と学習者の拠り所：角田市日本語講座から

角田市日本語講座という場所は支援者と学習者の心の拠り所となっている。特に、支援者については学習者との関わりの中で自分自身の居場所を形成している。学習者であるセナさんやルナさん、ルーシーさんは日本語学習以外の日常生活面での支援者によるサポートもあり生活も改善していき、それによる信頼関係を構築しながら角田市日本語講座という場が心の拠り所となっていった。その過程で、支援者が学習者の日常的な悩みの聞き役に徹することや、その環境改善のための助言によって、学習者が徐々に変わっていく様子を目の当たりにして、自分たちの行っていることは社会の役に立っているという気持ちが生じ、やりがいを感じていったのではないのだろうか。藤野氏も上山も当初3カ月しか活動をしないうちであったが、結果的には今日まで日本語教室に支援者として携わってきている。川口氏は持病の治療のため長期間教室を離脱しなければならない時期があったが、再び支援者として角田市日本語教室を支えてくれるようになった。支援者がこのように長期的に活動に参加するのは角田市日本語講座という場所がやりがいを与えてくれる場であり、外国人という学習者に関わることによって社会に貢献しているということを実現させ、充実感を与えているからではないだろうか。そのような意味で角田市日本語講座は支援者と学習者にとって拠り所となっていると考える。

### 3-2. 制度化による、成果の可視化：滝沢市国際交流協会から

滝沢市の日本語教室である「すまいる日本語」は滝沢市国際交流協会と自然合併した。ただ国際交流協会の母体となっているのは日本語教室「すまいる日本語」である。ここで特筆すべきは制度化である。制度化によって以前「すまいる日本語」に学習者として参加していた人たちに仕事のような役割が与えられることになった。しかし学習者だからといってすぐに仕事を与えられたわけではない。それはマリアさんの事例を通して明らかである。彼女は大村氏と長い親交があるとともに彼女と共に日本語を勉強してきた。その日本語ができた成果として、そして他の外国人の代表として選出されたのである。このことによって支援者は支援してきた人の成果を可視化できる結果を生み出している。このことによって国際交流協会への制度化は支援者の、自らの指導の意義を示すことができる絶好の場であるとともに、本稿で挙げた地域日本語教室とは別の社会へのつながり方を示唆している。学習者を公の場に出すこと、学習者と支援者が協働することにより、支援者は自らの意義を積極的にアピールしていると言える。

### 3-3. 支援者を軸とした地域協働を導く支援：のしろ日本語学習会から

のしろ日本語学習会は北川氏をはじめとする支援者を軸として地域住民と外国人との接点を作り出している。外国人が地域に馴染んでいくためには日本語もちろん必須であるが、日本の文化も学んで身に付けてもらう必要があり、その場合、北川氏一人だけでは到底成し遂げることはできず北川氏は自分を軸として能代に生活する人たちにも協力してもらっている。そこでは北川氏は日本人と外国人双方に対して地域成員としてどうあるべきかを説いている。特に花見や盆踊りなどの人の集まりやすい行事に学習者を含めて地域の人々を募ることによって学習者と住民との接点を生み出し、そこで出会う人たちに北川氏は学習者である外国人のことを代弁しているのである。そうすることは、能代での生活にまだ日が浅い学習者を少しでも住みやすく、生活しやすくするためでもあり、能代に住む市民として成長させるためのものでもある。このことは教育という側面もあるが、せつかく能代にきた学習者を食い止めるための方策でもあり、その点においても地域共同で行われていることに意義がある。

また、のしろ日本語学習会はUターンをした人々にも活躍の機会を設けており、社会的意義の高い活動に惹かれて能代出身の若い人たちが集まってくる。北川氏はのしろ日本語学習会に参加するボランティアにも積極的に日本語教授法を教える機会を作っており自分がいなくなった後もこのような体制が続けられなければ意味がないという。北川氏が生み出した教室は、北川氏を軸として様々な人たちを巻き込むと同時に、社会から求められている意義ある活動を創出しているのではないのだろうか。

## 4. 終わりに

以上のように、3つの地域日本語教室の特徴を表しながら考察を重ねた。支援者を語る上で学習者との相互性を抜きに述べることはできず、社会へのつながりや貢献を求めていることが明らかに



なった。最後に、3つの地域日本語教室の支援者が根本的に抱いている者の共通項として、やりがいや生きがいというものがあると考えられる。実際にこのような活動を行うことによってしか味わえないような苦悩や喜びがあり、それを学習者と歩みを合わせて分かち合う者こそ地域日本語教室の支援者であり、そのように人間を形成するのが地域日本語教室なのかもしれない。

## 【注】

- 1 なお、同時に野山(2013)は入管法が改正される以前から存在していた地域日本語教室についても言及しており、それは留学生が多かった、石川県金沢市や宮城県仙台市、栃木県宇都宮市などが挙げられる。
- 2 方法論についての主な研究として角知行、中井英民、岡田龍樹(2000)「奈良県の地域日本語教室に関する共同研究」天理大学人権問題研究室紀要(5), pp.23-62, 野々口ちとせ(2007)「共生を目指す対話をどう築くか——ある地域に日本語教室の事例から」言語文化と日本語教育(33), pp.161-164, 西口光一(2008)「市民による日本語支援を考える」日本語教育(138), pp.24-32, 野々口, 加藤(2016)「地域日本語教室での文字学習支援の必要性:2014年度日本語教育実習報告書の分析から」国際人間学部紀要(22), pp.19-26などが挙げられる。実践に関する研究としては石川紗莉、宇都宮絵里、児島由佳、西條結人、曹芳、田中大輝(2013)「地域日本語教室における学習者のニーズに基づいた授業実践」語文と教育27, pp.44-69, 大和啓子、渡部真由美、結城恵(2015)「定住を希望する外国人生活者向けマネープラン教材の開発と試用」群馬大学国際教育・研究センター論集(14), pp.37-51, 中川祐治、永島恭子(2017)「『地域』を活かした動画作成活動の実践:地域日本語教室における相互学習型活動の試み」福島大学地域創造28(2), pp.8385-8400などがある。
- 3 学習者に関する主な研究として、藤田美佳(2003)「乳幼児と共に学ぶ地域日本語教室の可能性:秋田県のしろ日本語学習会の取り組みをもとにして」国際教育論1, pp.28-43, 中川智子、尾関史(2007)「絵本を活用して「ことばの力」を育む—地域日本語教室「わせだの森」における実践を通して」早稲田大学日本語教育実践研究(6), pp.3-12, 金井淑子(2010)「地域日本語教室における学習者の学び—日本語非母語話者ボランティアの参加をととして」多言語多文化—実践と研究3, pp.150-175, ヤン・ジョンヨン(2011)「地域日本語教室における学習内容をめぐって:『標準的なカリキュラム案』の可能性と課題」地域政策研究14(1), pp.49-67, 入江友理(2012)「地域日本語教室における外国籍住民の日本語能力に関する自己評価」日本言語テスト学会誌15(0), pp.115-132, 新矢麻紀子(2013)「地域日本語教室における文字学習支援の課題と可能性」大阪産業大学論集人文・社会科学編17, pp.19-33などが挙げられる。
- 4 支援者に関する研究としては、永田良太、山木真理子(2012)「地域日本語教室における外国人支援者の役割:鳴門国際交流協会日本語教室の場合」鳴門教育大学研究紀要27, pp.225-231, 高梨宏子(2012)「大学生ボランティアの地域日本語教室活動に対するPAC調査」言語文化と日本語教育(43), pp.1-10, 小島佳子(2014)「日本語母語話者が地域日本語教室に参加する意義—日本語ボランティアの参加継続につながる動機付け—」神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要(3), pp.101-110などが挙げられる。
- 5 本研究では他にも青森県五所川原市、山形県山形市、福島県相馬市の日本語教室においても調査を行ったが、本稿では宮城、秋田、岩手の3か所のデータを使用する。分析・考察の際には東北6県における調査は重要な意義があった。
- 6 【総計】平成29年住民基本台帳人口・世帯数, 平成28年度人口動態(市区町村別)
- 7 【外国人住民】平成29年住民基本台帳人口・世帯数, 平成28年度人口動態(市区町村別)
- 8 葉の木沢活動センターは盛岡市へと通じる幹線道路沿いではなく住宅街に位置し、商業地や市役所などからも離

れている。最寄駅から徒歩10分圏内とはいえ、自家用車で移動することが多い地方住民らにとって、同センターは必ずしも利便性がよい立地ではないと思われる。

- 9 後述する異文化理解講座の受講者メンバー10名で、1995年に日本語教室「じょい」の前身である日本語教室「何でも相談室」をたちあげ、1998年には20名の仲間とともに日本語教室「じょい」を立ち上げた。
- 10 マリアさんは当時の自身の状況について、日本語がわからないため狭いアパートから出る事も出来ず、「まるで鳥かごの中の小鳥」であったと語る。
- 11 しかしながら、現在、彼女は「すまいる」には通っていないが、漢字の学習を続けており、「小学校4年生の漢字もまだわからないが、家で一人まだ勉強している。まだあきらめない」と語る。
- 12 会員は家族会員も含め71人であり、53名が総会に参加した。
- 13 実際、大村氏は「結局、国際理解講座言っても、一時的でしょ、ダメなんです、単発は。(中略)もっともっと受け入れる必要があるんだけど、受け入れると色々な日本の問題が起きる、起きるけれども、受け入れることによって日本人が国際社会に、本当の国際社会になるということだと思うんですよ。もちろん滝沢市もそう。外国の人がマリアさんとかあと何名とかでは、とてもじゃないけど、一緒に異文化交流をやったなんてことには言えないと思うんですよ」と述べている。
- 14 交通アクセスの面に関してはあまり良好とは言えず、仙台から新幹線と鈍行列車を乗り継いでいても同じ東北圏とはいえ5時間も掛かってしまう。また冬場になると積雪も凄まじく、安易に外に出られる状態ではなくなる。このように能代市は宮城県角田市や岩手県滝沢市と比べると、閉ざされた空間のように思える。それゆえ一度定住すると外へは中々出られない。

## 【参考文献】

- 内海由美子・吉野文(2000)「外国人住民の日本語学習とその支援—コミュニティと日本語教室—」長澤成次編著『多文化・多民族共生のまちづくり ひろがるネットワークと日本語学習支援』エイデル研究所 pp.120-134.
- 内海由美子(2009)「外国人散在地域における配偶者の日本語修得支援を考える」『日本語学5月号臨時増刊号 vol.28—特集 多言語社会・ニッポン—定住外国人との共生』明治書院 pp.88-96.
- 金井淑子(2010)「地域日本語教室における学習者の学び—日本語非母語話者ボランティアの参加をとおして—」多言語多文化—実践と研究(3) pp.150-175.
- 川端一博(2013)「国内の日本語教育の現状」『日本語学』3月号 pp.4-17.
- 小島佳子(2014)「日本語母語話者が地域日本語教室に参加する意義—日本語ボランティアの活動参加継続につながる動機付け—」神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要(3) pp.101-110.
- 杉澤経子(2002)「市民活動としての日本語学習支援—共に育む場をめざして」『日本語学』21号 明治書院 pp.59-67.
- 助川泰彦(2005)「宮城県におけるボランティア日本語教室」日比谷潤子・平高史也編『多言語社会と外国人の学習支援』慶應義塾大学出版会 pp.85-123.
- 永田良太、山木真理子(2012)「地域日本語教室における外国人支援者の役割—鳴門国際交流協会日本語教室の場合—」鳴門教育大学研究紀要(27) pp.225-231.
- 日本語教育学会(2008)『平成19年度文化庁日本語教育研究委嘱 外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発(「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業)』—報告書 日本語教育学会.
- 野山広(2005)「地域の社会状況と言語生活支援活動の実態から見えてくること」日比谷潤子・平高史也編『多言語社

- 会と外国人の学習支援』慶應義塾大学出版会 pp.1-9.
- 野山広(2009)「日系ブラジル人就労者の言語生活と日本語教育」『日本語学5月号臨時増刊号 vol.28－特集 多言語社会・ニッポンー定住外国人との共生』明治書院 pp.60-69.
- 野山広／山辺真理子／旗野智紀／河北祐子／宮崎妙子／伊東祐郎／久保井康典(2009)『地域日本語教室の5つの機能と研修プログラムー豊かな学びと人間関係作りを目指してー』シリーズ多言語・多文化共同実践研究(10) pp.58-106.
- 野山広(2011)「地域日本語教育の展開と複言語・複文化主義」北脇保之【編】『「開かれた日本」の構想ー移民受け入れと社会統合』ココ出版 pp.148-181.
- 野山広(2013)「地域日本語教育ーその概念の誕生と展開ー」『日本語学』3月号 pp.18-31.
- 藤田美佳(2003)「乳幼児と共に学ぶ地域日本語教室の可能性ー秋田県能代日本語学習会の取り組みをもとにしてー」国際教育評論1, pp.28-43.
- 藤田美佳(2004)「日本語学習の場を足がかりとした学黒人配偶者の地域参加ー農村に嫁いだ韓国人高齢女性の生活を通してー」日本の社会教育(日本社会教育学会)48 pp.129-144.
- 文化庁編(2004)『地域日本語学習支援の充実ー共に育む地域社会の構築へ向けてー』.
- 宮崎妙子(2012)「日本語コースから始まった被災地支援運動ー地域日本語教室の社会参加への試みー」多言語多文化ー実践と研究(4) pp.56-73.
- 米勢治子(2006)「「地域日本語教室の現状と相互学習の可能性ー愛知県の活動を通して見えてきたことー」名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究(6) pp.105-119.
- 渡辺雅子(2002)「ニューカマー外国人の増大と日本社会の文化変容ー農村の外国人妻と地域社会の変容を中心に」宮島喬・加納弘勝編『変容する日本社会と文化』東京大学出版 pp.15-39.

# The Anthropological View on Regional Japanese Language Classes in Tohoku Region:

Based on the Perspective of Japanese Supporters

Etsuko SATO

(Postdoctoral Researcher, Graduate School of Education, Tohoku University)

Lee INJA

(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

Hiroki SATO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

This paper aims to examine regional Japanese language classes in Tohoku region through an anthropological approach. Previous studies on regional Japanese language classes, mostly focus on the foreigners who attend such classes and the methods of teaching Japanese; there are few studies on volunteers or supporters in regional Japanese language classes and none from an anthropological perspective. In this paper, we conducted fieldwork at regional Japanese language classes in Kakuda, Miyagi prefecture, Takizawa, Iwate Prefecture, and Noshiro, Akita Prefecture.

Our analysis, indicated the following three points:

- 1) In Kakuda, for both learners and supporters, the class has become a place they can trust.
- 2) In Takizawa, the institutionalization of these classes has made volunteers' achievement.
- 3) In Noshiro, regional cooperation activities are conducted mainly by the chief supporter.

Keywords : Regional Japanese School, foreign learners, Japanese supporters, volunteers